

日韓がともに生きる起点となれ

森山新（お茶の水女子大学）

「日韓大学生国際交流セミナー」は、今年で14回目を数え、戦後ヨーロッパを戦争から共生へと導いた「複言語・複文化主義」の考え方にに基づき、韓国の言語と文化を学び、日本の言語と文化を教えながら、東アジア人としての国際的な人材を育成するプログラムとして2016年より新たな出発をなした。

今回は戦後最悪とも言える日韓関係の中、一時開催すらも危ぶまれたが、このような時だからこそ、交流を絶やしてはならないという思いから、釜山外国語大学の鄭起永総長、本学の室伏きみ子学長とも、強い開催の意思を示され、無事実施にこぎつけた。そしてこうした全面的な応援体制もあって、学生たちの安全のために、私とティーチングアシスタント（山田美奈さん）の他、国際課（小西達也さん）、国際教育センター（鈴木芽以さん）が交替で現地入りし、プログラムの安全な進行に最善を尽くすこととなった。釜山総領事館の全面的なご支援もいただき、参加学生との交流の時間も設けることができた。さらに私とティーチングアシスタントは、日本語教育実習期間に訪韓し、学生たちの教壇実習を見学するとともに、日韓学生フォーラムを開催した。釜山外大の各指導教員のあつい信頼と細かな手ほどきをもとに、教案の作成から模擬授業、事後の振り返りと休む間もなく実習に励む学生の姿はそれを見守る我々に大きな感動を与えてくれた。だれ一人として、教壇に立ち、日本語を教えた経験のない学生たちは、連日、徹夜に近い準備を行い、授業の全てを教員に代わって担当した。当初は緊張が肌で伝わる場面も多かったが、それでも綿密な準備を背景に、ある時は大胆に、ある時は堂々と、そして明るく、教壇実習をこなしていた。

今年度はシティズンシップ教育としての側面を強化するため、9月4日と6日の二回にわたって「第3回日韓学生フォーラム」を開催し、日韓が、そして東アジアがともに生きるために、若者は何ができるのか、対話と討論の場を持つことができた。戦後最悪とも言える日韓関係の中、その原因を探り、かつ両国の学生が学生として何ができるのか、何をすべきなのかを考え、討論した。今回のフォーラムこそは、対立もありうると覚悟し、緊張の中で当日を迎えたにもかかわらず、学生たちは熱心に討論と対話を続け、終了後の夕食会では巷の対立は想像もつかないような親密な雰囲気に包まれた。

釜山外大とは2016年に国際学術交流協定が締結されたが、交流は2007年より始まっていた。2007年から毎学期TV会議システムを活用した国際合同遠隔授業を行い、両国に横たわる様々な問題、ステレオタイプ、コンフリクトなどを日常的に取り扱ってきたのはじめ、2011年度からは、東日本大震災に端を発し、釜山外大からも学生を招き、世界8か国の学生が本学に一堂に会し、毎年「国際学生フォーラム」を開催、世界の災害に若者は何ができるかを話し合った。2015年には、戦後70年、日韓国交回復50周年を記念し、本学の学生35名を連れて釜山外大を始め韓国の3つの大学を訪問し、両国の過去、互いの良さ、そしてともに歩む未来について話し合った。その後もTV会議システムを用いた合同授業で、日韓の間に立ちただかる国家のコンフリクトや個人のコンフリクトについて考えたり、日韓の歴史問題を扱い、共通教科書の作成を考えたり、自身のアイデンティティ形成のプロセスを振り返り、日韓の個人的、国家的対立の原因が、社会化のプロセスの中で教育や報道などの影響を受けながら形成されてきたことなどを学んだ。そうした両大学による一連の歩みにより、日韓、さらには東アジアが、何とかこの困難を打開して欲しいと願

ってやまない。

両国の学生たちは、ともに生きるための「複言語・複文化主義」に促され、ナショナリズムを克服し、積極的に交流を展開し、今まで以上に深い絆に結ばれた。それぞれのアイデンティティは、国家の枠を超え、よりインターナショナルなものへと成長した。釜山外大の教員、スタッフの方々も、そのように大きく変わりゆく本学の学生たちを見ながら、苦勞の多い本プログラムの開催に大きな手応えを感じていた。

複言語・複文化主義は、他の言語・文化を学ぶことを通じ、母語と母文化を中心に今まで当然視していた価値観を相対化し、他の文化に関心と敬意を持つことで、ナショナリズムを克服し、ヨーロッパが、そしてアジアがともに生きるためのインターナショナルなアイデンティティ構築に寄与するとされている。もちろん、知識として、またスキルとして他の言語・文化を学ぶだけで、このような変化を引き起こすことは難しいであろう。しかし、それを積極的に促すために、フォーラムなどの交流の場を提供し、お互いに対する愛情と尊敬の気持ちを育み、正しい知識とナショナリズムを超えた視点に基づいて相互理解を深め、交流を行っていけば、対立を和解に、そして共生へと導く変化は着実に起こりうるということを今回のプログラムを通じて痛感している。

釜山の地はこれまで、日本と韓国の間にあつて、いくつもの悲しみといくつもの喜びを経験してきた。豊臣秀吉の時代にはまずもって日本の被害に合い、その後徳川幕府の関係修復により、朝鮮通信使派遣の起点となった。しかし植民地時代には、歌「釜山港に帰れ」にあるように、多くの民が日本へと連行される悲劇の舞台となった。そうした悲しみを乗り越えながら、釜山は今、日本と韓国、そして東アジアをつなぐ基点として生まれ変わろうとしている。釜山外大には「アジア共同体研究所」が設けられ、毎年「アジア共同体論」という授業が行われている。また釜山外大は、ヨーロッパが欧州共同体建設のために策定した「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」の指導法をいち早く採用し、日本語教育を行っている。私が釜山外大に注目し、協定締結にこぎつけ、交流を開始した理由がそこにある。

今回築いた重要な一歩を、今後さらに発展させ、近い将来、東アジアがともに生きる未来をこの学生たちの手で作りあげられることを祈り、期待してならない。

今回、このように貴重な進歩を遂げることができた背景には、様々な形でプログラムを提供してくださった、釜山外大の日本語創意融合学部の諸先生、国際交流チームのスタッフのご尽力があつてのことである。またこのような危機的かつ多忙な状況の中、釜山総領事館の方々のあつご支援により、無事に全てのプログラムを終えることができた。本学でも室伏学長をはじめ、国際課など、全学挙げての体制が生まれ、プログラムの成功を導いた。この場を借りて心から感謝したい。